

シノドス国際社会動向研究所メルマガ 20180119  
「新しい中間層の可視化分析 韓国での成果報告」  
橋本努

昨年 2017 年の 4 月に「シノドス国際社会動向研究所」を設立して以来、私たち研究所のメンバーは、ワークショップの開催やフェイスブックでの公開議論など、さまざまな活動を行ってきました。

メインとなる活動は理論研究と社会調査です。最初に理論的な枠組みを構築し、その理論に基づくアンケート項目を練り上げて、昨年 9 月には実際に Web アンケートを通じて社会調査を実施しました。

そのデータが 10 月に上がってきましたので、11 月に統計分析を開始しました。

実は、私にとって統計ソフト SPSS を用いた統計分析ははじめてだったのですが、私の下で研究している博士課程の小田和正さんの協力を得て、「回帰分析」や「相関分析」など、一通りの基本的な分析手法を用いてデータを分析することができました。

12 月には、その最初の成果を、橋本が韓国のソウルの「中民リサーチ研究所」（12 月 11 日）と「ソウル国立大学（日本研究所）」（12 月 12 日）において、それぞれ報告してきました。後者の報告は、講演会として企画されました。シノドス・ラボの理事の富永京子さまにもご出席いただきました。

今回、私たちの成果の報告のために、二つの機会を設定していただいた韓国の社会学者、ハン・サンジン先生（ソウル国立大学名誉教授、北京大学客員教授）に心から感謝申し上げます。ハン・サンジン先生は現在、「中民リサーチ研究所」の所長でもあり、同研究所での私の報告に対して、きわめて生産的な、鋭いコメントを投げかけていただきました。とても参考になりました。

そのときに指摘された最重要の問題は、いったい今の日本で、台頭しつつある新しい中間層など存在するのかどうか、「台頭する」とはいかなる意味か、という問題です。たしかに産業構造に即していえば、新しい産業の担い手が勃興しているわけではありません。しかし「新しい中間層」の「新しさ」は、おそらく二つあるでしょう。一つは新しい生活スタイル（「ミニマリズム」「草食系男子」など）の勃興です。もう一つは、新しい社会現象に対する新しい対応（外国人観光客の増大、孫世代への相続配慮など）です。こうした二つの側面から「新しい中間層」の意識を「台頭しつつあるもの」として明確に位置づけることができるのではないか、と思いました。

また、ソウル国立大学の日本研究所では、さまざまな日本研究者たちにご来席いただき、現代日本社会が抱える諸問題と私たちの研究プロジェクトの関係について知っていただくよい機会となりました。同研究所の方々は、シノドス本体の活動をよくご存知で、シノドスに執筆された方もいらっしゃいました。

いずれの報告も英語での報告でした。最初からこのような国際的な環境のなかで研究成果を報告できたことをうれしく思います。

今回の報告は、統計分析成果の第一歩となるものですが、以下にその概要をまとめてご

紹介します。

周知のように昨年秋の衆議院議員選挙では自民党が圧勝し、野党各党はますます混迷を深めています。いずれの野党も、思想理念上の羅針盤を失いつつあるように見えます。こうした状況下で、私たちは「新しい中間層」の意識に基づく対抗勢力を、いかにして構築することができるのでしょうか。しばしば「リベラルの保守化」が語られますが、「保守 vs リベラル」という政治的対立軸を作ることは現時点では難しいようにみえます。

しかし私たちは、「リベラル」の理念を再定義して、二大政党制の基礎となる理論や社会分析を示したいと思っています。「リベラル保守」といっても、多様なはずで、大きく二つの意識に分節化できるはずで、

「新しい中間層」は、「新しいリベラル」の勢力を構築しうる存在です。しかしそのような対抗勢力は、どんな社会意識をもつ人たちなのでしょう。またその供給源はどこにあるのでしょうか。

私たちはまず、「リベラル」という概念を新たに再規定するために、理論を二段階構えで構築しました。

最初に注目したのは、1990年以降に新自由主義の諸政策を大胆に取り入れた北欧の福祉国家が、新自由主義と両立する形で示した「新しい福祉主義 Neo-welfarism」の諸理念です。この「新しい福祉主義」を支持する人たちは、「新しい中間層」ないし「新しいリベラル」に相応しいように思われます。北欧諸国は新自由主義の政策を取り入れると同時に、「社会的投資国家」として知られるようになりました。ここで、北欧諸国に特徴的な「投資志向」は、国家の政策のみならず、一般の市民の生活志向にも当てはまるように思われます。ところがこれまで「投資志向」という特徴は、「リベラル」あるいはその基礎にある「リベラリズム」の定義には含まれていませんでした。これまで多くのリベラル派が北欧諸国の政策運営に注目したにもかかわらず、これは意外な事実ではないでしょうか。私たちは、投資志向に関する質問項目を立てて、人々の投資志向に関する意識を調査しました。最初の質問は、次のようなものです。

[Q-1-1] 「〇〇さんはすでに退職して年金生活を送っていますが、いくばくかの財産を持っており、それをかわいい孫のために有効に使いたいと考えています。孫の将来のキャリアのことを考えると、かれらの教育費用として使うのが良いように思いますし、一方ではとにかく経済的に不安のないように土地や金融資産として残す方が良いようにも思います。あなたがもし〇〇さんだったら、どちらを優先しますか。」

- (1) 教育費として使う。                      (2) 土地や金融資産として残す。

この質問に対して、皆さまはどのように答えるでしょうか。

今回、1200人のアンケート応答者の意見は、ほぼ半々に分かれました。教育に投資するタイプと、資産形成を優先するタイプの二つに分かれたのです。ここに私たちは、重要なイデオロギー対立を見出すことができるのではないかと考えます。

この他にも私たちは、投資志向に関する別の質問をし、また外国人に対する寛容度についての質問も用意しました。合計で四つの質問から、私たちは「新しいリベラル」の基本

特徴を分節化しました。「新しい中間層＝新しいリベラル」とは、「投資志向」の人たちであり、また外国人に対して公平に接する「普遍主義志向」の人たちである、というのが私たちの最初の定義となります。

次に第二段階に進みます。「新しいリベラル」は、第二段階として、「健全な権威を認めるリベラル」として特徴づけることができるのではないか。こうした関心から、私たちは「健全な権威」の諸基準というものを四つ用意して、それぞれの基準に関する質問を練り上げ、合計で16のアンケート項目を作成しました。四つの基準とは、「反偏見」「対等化」「脱文脈」および「批判的態度」です。「新しいリベラル」は、こうした四つの基準に基づいて、健全な権威を支持するだろうというのが、私たちの仮説です。

さて、ここからさらに分析は続くのですが、以下ではそのハイライトのみ、記します。

「新しい中間層」は、第一に、「投資志向」と「普遍主義志向」によって特徴づけられます。そして第二に、「健全な権威」の四つの要因、すなわち、「反偏見」「対等化」「脱文脈」「批判的態度」によって特徴づけられます。合計で六つのこれらの特徴は、どのような社会層の人たちに認められるでしょうか。私たちは、現代社会において何らかの特徴のある人々のグループ（「クラスター」と呼ぶことにします）を、20ほどリスト化しました。例えば、「創造階級」「草食系男子」「セレブな主婦」などです。

こうしたクラスターに属する人々は、はたして「新しいリベラル」の諸特徴をもっているでしょうか。

結論を簡単に示しますと、「創造階級」「低所得創造階級」「コト消費志向」「起業家的文化応援者」「自然派」「歓待者」「ミニマリスト」「セレブな主婦」という比較的新しい人間類型に当てはまる人たちは、「新しいリベラル」の意識と有意な関係があります。回帰分析において有意な因果関係が認められます。ところがこれに対して、「自称リベラル」あるいは「自称リベラルのなかでも核心的な人たち（「コア・リベラル」と名付けました）」は、こうした新たに台頭してきた人たちの属性とは、なんら関連していないのです。

これは驚きです。「自称リベラル」とは、自分で自分のことを「どちらかといえばリベラルと思う」と答える人たちです。しかし「自称リベラル」の人たちは、「新しいリベラル」の意識と乖離してしまう。別の言い方をすれば、新しいリベラルな意識をもった人たちは、自分で自分のことを「リベラル」だと認識していないようです。

おそらくここに、政治意識の問題があるのではないのでしょうか。

「あなたはリベラルですか」と聞かれて、「いや、よく分からないな」とか「リベラルじゃないな」と答える人でも、実際には、「新しい意味でのリベラルな意識」を持っている可能性があります。すると私たちは、そのような人々に対して、「あなたは実はリベラルですよ」と診断することができるかもしれません。

私は以前、拙著『経済倫理＝あなたは、なに主義？』で、類似のやり方で人々のイデオロギー意識を診断しました。私が設定した四つの質問にすべて答えると、人々は16種類のイデオロギーのなかのどれかに分類されます。この四つの質問に基づいて、「あなたは〇〇主義ですよ」という具合に、政治意識を診断することができます。例えば、自分は「ネオリベラル（新自由主義的）」だと思っていたなくても、実際には「ネオリベラリズム（新自由主義）」に分類される人もでてきます。今回も、このようなやり方を応用して、新しいリ

ベラル派の意識を析出しました。

例えば私たちは、「ミニマリスト」というクラスターを作りました。ミニマリストとは、できるだけ最小限のモノで生活しようと試みる人たちです。この属性をもった人々は、自称リベラルやコア・リベラルとは関連していません。しかし「新しい中間層」の諸特徴の中の、「普遍主義」と「脱文脈」の二つに関連していることが分かりました。つまり、ミニマリストたちは、自分では「リベラル」という意識を持っていないにもかかわらず、「新しいリベラル」の二つの特徴を有していたのです。

このような仕方でも、他のクラスターについても分析して、相関要因についての解釈を試みました。

またこの他にも、カハン分析の橋本修正版に基づく分析なるものも試みました。詳しい報告は、これから作成予定の報告書にまとめる予定です。また報告書では、まだ分析できていないアンケート項目についても分析もすすめる予定です。

今回の社会調査分析によって、「新しい中間層＝リベラル派」の供給源が、どのような人たちなのかが見えてきました。新しい中間層は、リベラルであるという自覚があまりありません。さまざまなクラスターに分布していると考えられます。そのような人々を束ねることによって、新しい政治意識、あるいは新しい政治の勢力を再編できるのではないかと。分析をさらに進めていきたいと思えます。